

教員推薦図書 2019年4月～9月

推薦教員	経営学科 教授 田中真理子先生	【推薦コメント】 2017年度、芸人の西野亮廣は『えんとつ町のプペル』（絵本）で32万部以上を発行し、オリコン上半期ランキングで児童書部門とタレント本部門の2冠を達成した。本書では出版事業でこのように成功した背景と手法が語られている。 西野は絵本を作成するに当たって、クラウドファンディング（ネットでワンコインから参加できる支援の輪）で支援者数15,000人、支援額1億円以上を集めたという。また、絵本を数名で分担執筆するなど、今までにはない方法を使った。その上、評判になった『えんとつ町のプペル』をネット上に無料配信するなど、極めて特異な手法を用いている。目次には「お金を稼ぐな信用を稼げ」「踏み出す勇気はいらない。必要なのは『情報』だ」など興味深い言葉も並んでいる。 学問的な内容とは言えないかもしれないが、やる気と努力、さらに、アイデア運用への強い意志は、必ずや皆さんの参考になるだろう。
書名	革命のファンファーレ 現代のお金と広告	
著者名	西野亮廣 著	
出版者	幻冬舎	
請求記号	779.14/Nis	
資料ID	903017147	

推薦教員	子ども学科 准教授 青木研作先生	【推薦コメント】 数年前に調査でイギリスの中等学校を訪問した際、対応してくれた校長先生から、日本の方が優れた教育を行っているのになぜイギリスに調査に来るのかと問われたことがあった。優れた教育とはなにかについてはさまざまな考え方があるが、確かに、各種の国際学力調査の結果を見ると、日本の子どもたちの成績は上位にあり、「学力」の面で言えば、日本の教育は一定の成果をあげているといえそうだ。では、なぜ他国に比べて日本の教育が「学力」の面で成功しているのか。本書は、そうした疑問に対して、イギリス人教育研究者の視点から分析したものである。 著者は、日本の教育の「成功」の要因（＝「強み」）を、学校教育の中だけでなく、家庭の協力や塾の存在、そして社会の教育観の中に発見している。一方で、そうした環境が子どもたちにとって過度のプレッシャーとなっている可能性も指摘している。そして、それらの発見や指摘が、ユニークな方法のフィールドワークと精力的な文献研究に基づき、平易な言葉で論じられているところに本書の面白さがある。 なお、フィンランド、カナダ、シンガポール、中国（上海）についても同様の研究方法に基づいて分析が行われている。これらPISAの成績上位国・地域の分析から見出した共通点に基づき論じられる最後の二つの章は読みごたえがある。各国の教育を比較することの面白さや大切さを感じることのできる一冊である。
書名	日本の15歳はなぜ学力が高いのか？ 5つの教育大国に学ぶ 成功の秘密	
著者名	ルーシー・クレハン 著 橋川史 訳	
出版者	早川書房	
請求記号	372/Cre	
資料ID	901116456	

推薦教員	国際学科 教授 江澤恭子先生	【推薦コメント】 哲学書と聞くと難しくて退屈で何より意味不明…とと思ってしまいましたか。私も 偶然この本を手にするまではそうでした。アムステルダム空港で6時間もの乗り継ぎ時間を持って余し、ぶらりと立ち寄った本屋でこの珍しい表紙が目にとまったのです。 『プラトンとカモノハシがバーに入って…』というタイトルも気に入り読み始めると、哲学は哲学でもむしろ哲学をバカにしているかのようなジョークが続き、途中で飽きることもなく最後まで笑いながら読み終えました。 一つジョークを紹介しましょう。例えば「本質主義」の説明では―― <i>“Why is an elephant big, gray, and wrinkled?”</i> <i>“Because if he was small, white, and round, he’d be an aspirin.”</i> 確かに、大きくない象でも象であり、少々茶色っぽい象でも象であって、しわがなくても「しわのない象」ということになるわけですね。小さくて白くて丸い物を手にしている人に「それアスピリン？それとも変則的な象？」とは訊きませんから…。 どれもこれもこんな感じで、面白くなさそうな実存主義も堅苦しそうな倫理主義も何となく理解した気になれます。英語ですが、頑張ってみてください。 誤解と偏見をなくし、こころのケアを必要としている人が適切な精神科医療を受けるための指針になる。また、これから心理臨床の仕事をしたいと思っている人には、そのウラ事情を知ることのできる必読の書である。
書名	Plato and Platypus Walk into a Bar … : Understanding Philosophy through Jokes	
著者名	Thomas Cathcart & Daniel Klein	
出版者	Penguin Books	
請求記号	104/Cat	
資料ID	902014653	

推薦教員	臨床心理学科 教授 井上忠典先生	【推薦コメント】 なんとも惹きつけられるタイトルである。内科や外科といった一般の診療科であれば、多くの人が実際にお世話になったこともあるし、TVドラマや映画でも目にしたことがあるだろう。けれども、精神科は、なかなか目に触れる機会がない。偏見や誤解に基づいた漠然とした曖昧なイメージが先行して、多くの人にとっては謎の多い世界である。そこには何かヒミツが隠されていて、心の奥深くに広がる闇の世界につながっているのではないかと、という怖いもの見たさに近い感覚を引き起こされる。 私自身、心理臨床の仕事をはじめから30年余りが過ぎ、そのうちの半分近くを精神科臨床で過ごしている。それでも、精神科の医者やその医療システムについて、これってどうなっているの？と疑問に思うこともあるし、こういうことなのかなあ、と漠然とわかったつもりでいることも多い。この本は、それらの疑問や曖昧なことについていねいに答えてくれる。 すでに精神科に通っている人にはもちろん、心の問題や症状に苦しんでいて病院を探している人すべてにおすすしたい本である。精神科の誤解と偏見をなくし、こころのケアを必要としている人が適切な精神科医療を受けるための指針になる。また、これから心理臨床の仕事をしたいと思っている人には、そのウラ事情を知ることのできる必読の書である。
書名	精神科のヒミツ クスリ、報酬、診断書	
著者名	藤本修著	
出版者	中央公論新社	
請求記号	493.72/Fuz	
資料ID	901116175	